

放 射 線 科



1. 放射線科の紹介

画像診断および放射線治療やIVRといった低侵襲治療は現代医学の中で最も進化した領域です。放射線科医はその中心的な役割を演じることの出来る魅力的な診療科であり、日常診療における様々な場面で重要な役割を担うようになっています。当科では画像診断にAI（人工知能）や遠隔画像診断システムを積極的に導入し、読影の効率化や様々なライフスタイルに応じた勤務態勢を構築しています。現在、県内外で画像診断および放射線治療を通して地域医療に貢献する同門の医師が約100名程度在籍しています。また、当科では育児・復帰支援を全面サポートし、個々人の労働時間や業務内容の希望に柔軟に対応することで、妊娠出産を経て様々な形で働き続ける女性医師もたくさん在籍しています。このように、放射線科を目指すことは、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の上で大きな選択肢となります。

2. プログラムの目的と特徴

放射線科には、大きく画像診断、放射線治療といった2つの大きな専門領域があります。専門研修の3年間では、放射線科医師としてこれら両方の専門領域について、まんべんなく知識を習得し、画像診断・放射線治療すべての基礎・臨床を学ぶことを目指します。画像診断では、診断レポート作成のみならず、造影検査や透視造影などの検査業務を通してその必要性や緊急時の対応を習得します。IVRでは肝細胞癌の動注化学療法などの血管内治療を通して、基本的な血管穿刺や止血の知識を学びます。放射線治療では治療計画策定を通して、治療線量や有害事象などの一般的な知識習得を目指します。なお、専門研修の初年度では、特に放射線科医としての基本的事項を理解し、安全な医療行為が行えるよう研修していきます。

3. 経験目標

専門研修の3年間で経験すべき症例として、単純X線写真400例、消化管X線検査60例、超音波検査120例、CT600例、MRI300例、核医学検査50例、およびIVRと放射線治療が各々30症例以上が必要です。また、指定された学術集会への参加や発表、必須講習受講や論文などの執筆活動が必要です。



読影室の風景



IVRの様子

4. 指導医と指導体制

教授・診療科長	城戸 輝仁	循環器画像診断
准教授	松田 恵	腹部、乳房画像診断
准教授	川口 直人	核医学、IVR
助教	上津孝太郎	放射線治療
講師・医局長	中村 壮志	神経、循環器画像診断
助教	海老原い	画像診断全般
助教・外来医長	福山 直紀	IVR

助教・病棟医長	高田 紀子	放射線治療
助教	岡田 知久	画像診断全般
助教	河内 孝範	画像診断全般
助教	年森 亘	画像診断全般
助教	細川 貴晶	画像診断全般
助教	多保 康平	画像診断全般

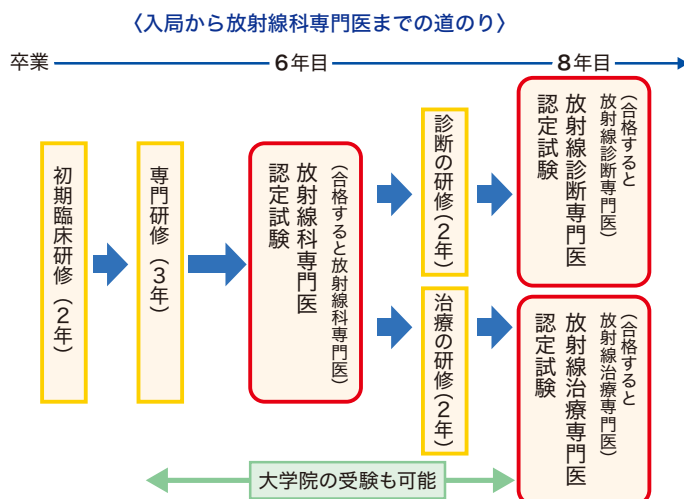
5. 研修に関する行事

	月	火	水	木	金
AM	外来CT業務	IVR	カンファレンス	病棟業務	放射線治療
PM	読影	外来MRI業務	病棟回診・医局会	読影	外来PET業務

*毎日夕方に上級医によるレクチャーや症例検討会を実施しています。

6. 新専門研修プログラム

当科では、初期臨床研修（2年間）終了後、専門研修（3年間）を完結し、専門医試験合格を目指します。3年間の専門研修では、1年目、2年目、3年目のどの期間を専門研修基幹施設と専門研修連携施設での研修を行うかにより、複数のコースが設定されています。いずれのコースも、研修期間の3年間のうち1年間は専門研修基幹施設（愛媛大学）を、2年間は専門研修連携施設で研修できるように設定されています。



7. 専門研修修了後について

3年間の研修終了後は放射線科一次専門医を取得し、診断と治療分野に分かれて、診断および治療専門医取得を目指します。その後は様々な領域のサブスペシャリティ（画像診断、IVR、治療、核医学など）に分かれていきます。大学院への進学はいずれの時期にも可能です。臨床研究での学位取得が可能ですので、専門医と博士号

の取得を同時に目指すことが出来ます。大学院へ進学した場合でも、大学への診療や他病院の診療支援に携わるため、臨床のスキルアップや収入面においても、臨床医と遜色なく、大学院で医学博士号取得を目指すことが出来ます。

8. 専門研修の問い合わせ先

担当：中村壮志（愛媛大学医学部放射線科） TEL：089-960-5371
FAX：089-960-5375 E-mail：radiology@m.ehime-u.ac.jp

